

パークマネジメントによる公園の管理・運営に関する研究

～兵庫県神戸市みなとのもり公園を事例として～

明石工業高等専門学校 専攻科建築・都市システム工学専攻 稲山 依里
明石工業高等専門学校 建築学科 八木 雅夫
明石工業高等専門学校 建築学科 大塚 毅彦
(株)環境緑地設計研究所 辻 信一

1. はじめに

日本各所に数多くある公園施設の中には、少子高齢化や市民の生活文化の変化などに対応しきれず、利用者が極端に減少してしまった公園が多くある。このような公園は活気が失われ、人々は遠ざかり安全性が失われてしまっているほか、公園自体の存在意義が問われるなど様々な問題を抱えてしまっている。

こうした公園に関する様々な課題や問題を改善するための手法として、「パークマネジメント^{注(1)}」と呼ばれる公園の管理運営の方法がある。山崎亮の著書「コミュニティデザイン¹⁾」でも、パークマネジメントに関して『単に来園者を待つだけでなく、積極的にプログラムを作り出して来園者を誘う公園の運営手法』と述べるなど、ソフト面が強調される場合もある。

本稿では、兵庫県内の公園施設でパークマネジメントを実際に行っている「みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）」を対象とし、その現状と課題を明らかにしようとした。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、みなとのもり公園誕生の経緯と特性について述べた上で、現地調査とアンケート調査により、公園を運営管理している側が希望する公園のあり方と、実際に利用者が肌で感じている公園のあり方とを明らかにすることである。特に、運営管理側と利用者側との意識の差を検討することにより、今後の公園運営のあるべき方向性を見出そうとした。

研究の方法としては、市民活動団体「みなとのもり公園運営会議」に焦点を当て、開設前から現在に至る経緯や市民と利用者による公園整備事例を把握し、市民団体から話を聞くとともに、実際に自らワークショップや運営会議などの活動に参加し、フィールドワークを行った。

また、みなとのもり公園において行われる様々なイベント等に参加し、参加者を対象にアンケート調査やヒアリング調査を実施した。これにより、みなとのもり公園の管理運営方式が一般利用者の方々にとどこまで認知されているのかを調査し、認知の不足で生ずる、問題点や改善すべき点について検討を行い、運営管理者、利用者双方からみたみなとのもり公園とその運営方式に対する評価の違いを

明らかにして、今後よりよい公園にするために必要な管理運営案を提案する。

3. みなとのもり公園について

(1) 対象地の概要

兵庫県神戸市は、平成7年(1995年)1月17日、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた。その経験や教訓を風化させることなく、後世の人々に継承していくために、神戸市は、もともとJR貨物神戸港駅であった跡地を利用し、大震災を経験した都市の特別な意義をもつ事業として「神戸震災復興記念公園」を計画した。

神戸のまちが復興から発展へと前進する姿を、木々の生長とともに見つめていく事業として、市民が主体となって、考え、つくり、育て、慈しむ「神戸震災復興記念公園（みなとのもり公園）」は神戸の震災復興の記念事業となっている²⁾。



図-1 みなとのもり公園園内図³⁾

名称 : 神戸震災復興記念公園（みなとのもり公園）
位置 : 神戸市中央区浜辺通（JR貨物神戸港駅跡地）
面積 : 約5.6ha
公園種別 : 総合公園
整備年度 : 2000(平成12)年度～2009(平成21)年度
事業手法 : 防災公園街区整備事業
事業主体 : 神戸市・都市再生機構
(旧)都市基盤整備公団

(2) みなとのもり公園の特徴

i) 市民参画

みなとのもり公園の大きな特徴として、公園の計画段階から完成後の運営に至るまでの市民の参画が挙げられる。この公園の運営管理における市民参画は、整備検討段階の2002（平成14）年度の市民ワークショップから始まり、以後、「懇話会」「検討会」と公園づくりの段階に応じて市民の参画は続いてきた。とくに、「ニュースポーツ広場」の計画では、実際にスポーツを楽しんでいる若者の参画を得て、細部にわたる内容にまで意見交換をしながら設計が進められてきた。一方で、公園内の植栽や花壇づくりにあたっては、多くの市民が自宅で育てたドングリの苗木を持ち寄って植樹し、芝生づくりでは数百人の市民が工事中の公園に集まり、苗づくりや植え付けを行った。

ii) 防災公園としての役割

この公園の持つ大きな役割かつ、特徴のひとつとして、通常の公園とは違う防災公園としての機能を持っていることが挙げられる。公園の敷地内には震災復興記念のモニュメントや災害時用の仮設トイレ用マンホール（写真-1）、備蓄倉庫（写真-2）などが設置されている。それに加えて、主に地域住民を対象とし、1か月に1度、災害発生を想定した炊き出し訓練も行われている。小さな子供からお年寄りまで、幅広い年代の人々が訓練に参加することにより、防災に必要な不可欠な人と人との「繋がり」を形成する試みが行われているといえる。

東日本大震災以降は、公園の立地を考慮し、津波による被害想定を行う必要も出てきた。



写真-1 災害発生時用の仮設トイレ用マンホール



写真-2 公園内の備蓄倉庫

iii) みなとのもり公園運営会議について

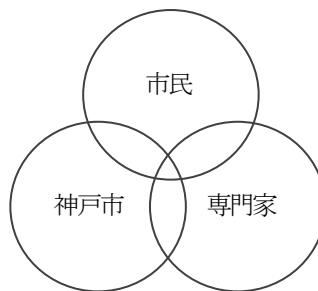


図-2 みなとのもり公園運営会議組織図

「みなとのもり公園運営会議」とは、市民参画を通じて公園を「つくり続ける公園」としての利活用を実現していくことを目的として、2010年の3月に設立された組織である。月に1度定例会議が開かれ、みなとのもり公園に関する議題について参加者全員で議論し、活動計画を話し合う「場」である。会議では、各団体の活動報告や、イベント・行事などの提案、公園で起きた諸問題についての議論など、様々な内容について話し合いが行われ、その話し合いをもとに、みなとのもり公園をより良くしてゆくための様々な活動を行っている(表-1)。

この会議には、みなとのもり公園の基本構想段階から参画してきた市民や、公園を活動拠点としている植物を管理する団体や各種スポーツ系の団体の方々、行政の立場である神戸市の職員の方々、そしてそれらの中立の立場からコーディネーターとして公園の管理運営を行う専門家の方々など、さまざまな職業や年代の人々が集う(図-2)。

討論内容は、公園運営に関するさまざまな事項や、植栽管理、防災活動、青少年育成や被災地支援など、多岐にわたる。市民による自主的総合的公園運営を行政との協働で実践していることが特色である。

表-1 みなとのもり公園運営会議の主な活動内容

活動の種類	活動の内容
植栽管理	草抜きや種まき等、公園内の植物の手入れ
清掃活動	公園内の清掃活動
防災活動	震災を想定した炊き出し訓練の実施
宣伝活動	公園内のポスター、立て看板の制作
維持・管理	公園内施設の破損箇所の修繕 薪小屋、倉庫内の用具の管理
その他	公園にて行われるイベント等の補助

4. アンケート調査・ヒアリング調査の結果

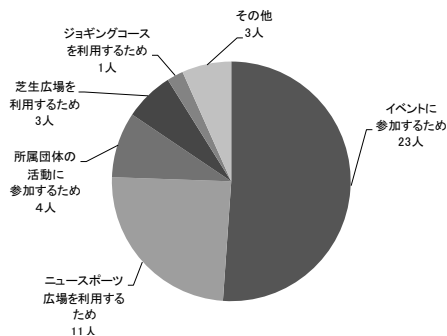


図-3 みなとのもり公園来園目的

(1) イベント参加者を対象とした調査

2013年12月15日にみなとのもり公園内の貿易センター口近くの芝生スペースにおいて行われた炊き出し訓練参加者に対して、みなとのもり公園とその運営方式に対する評価に関してアンケート調査を行った。アンケート対象者は、炊き出し訓練参加者45名で、アンケート調査と並行してヒアリング調査も行った。

イベント参加者の方々に、みなとのもり公園への来園目的についてアンケート調査を行ったところ、「イベントに参加するため」と回答した来園者が全体の約半数を占めていた(図-3)。それ以外の人々は、ほかの目的でみなとのもり公園に来園した際に、たまたま炊き出し訓練が行われているのを発見し、途中から参加した人であった。アンケート調査時に、イベント参加を目的とせずに来園した人々にヒアリング調査を行ったところ、「事前に炊き出し訓練の日程を知っていれば参加していた」という意見の人が多くいた。実際、炊き出し訓練の掲示は公園内の芝生広場の真ん中あたりに手作りの看板がひとつ置かれているだけで、公園を利用する人々の目には入りにくい位置にあった。今後は炊き出し訓練の実施日のお知らせの仕方を考え直す必要があるといえる。

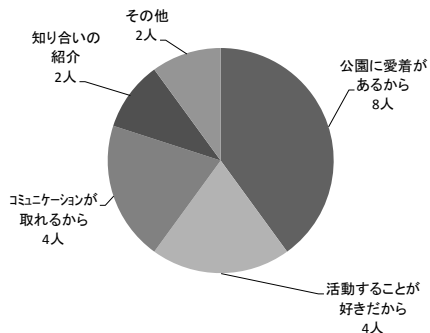


図-4 イベント参加理由

今回の炊き出し訓練以外に、過去にみなとのもり公園において行われた様々な活動への参加経験があるか否かをイベント参加者にたずねたところ、「ある」、「ない」共に、ちょうど全体の半数ずつという結果になった。

その内「ある」と回答した人々に、その参加理由を問う質問に答えて頂いた(図-4)。その回答を見ると、「公園に愛着があるから」と回答した人が全体の約半数を占め

ており、一番多かった。それ以外の回答を見てみても、前向きな思いを持ち自主的に活動に参加している人々が8割近くを占めた。

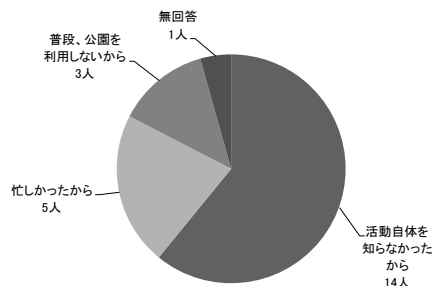


図-5 イベント不参加理由

反対に「いいえ」と回答した人々の回答を見てみると、活動しているのは知っていたが、「普段、公園を利用しないから」や、「忙しかったから」など、理由があって参加する事を選ばなかった人が4割を占めた(図-5)。この4割の人々は、仕事やその他の用事でどうしても頻繁に活動に参加することが難しい人々である。「活動しているのを知らなかったから」と回答した人々をどのようにして減らしていくかは今後の課題であろう。回答者の半数以上をこの回答が占め、活動の発信がうまく機能していないことがわかる。

今後、活動の参加者が少しでも増えるよう、公園内の設置看板の見直しや、SNSなどを駆使し、広報活動を広げていくことが大切だといえる。

(2) みなとのもり公園運営会議参加者を対象とした調査

2013年12月18日に、みなとのもり公園運営会議参加者に対してアンケート・ヒアリング調査を行った。参加者の職業に関する項目では、参加者の約半数が会社員と公務員という結果となった。会社員からアーティストまで、幅広い職業の人々が出席していたが、学生の姿はなかった。みなとのもり公園を多く利用しているであろう学生の姿が1人も見られなかった。この結果は意外であったが、改善すべき点だと考える。ただ公園を利用するだけではなく、未来のみなとのもり公園のあり方について話し合う会議の場に、学生などの若い世代の参加者をどのようにして増やしていくかは、今後の課題である。

5. 調査結果の考察

(1) 利用者・公園運営者の公園に対する「愛着」

公園の計画段階から市民参画の形を取り、パークマネジメントを続けることによってそこを利用している人々には、長い時間をかけて繰り返しみなとのもり公園と関わりを持ち続けることによって、公園に対する「愛着」が生まれるということがわかった。一般的な公園では、みなとのもり公園のように企画・構想段階から市民の意見が反映されるという例はほとんどないのである。

計画段階から継続して市民が関わり続けることによって、そこを利用する人々は、自主的に繰り返し公園と関わ

りをもつようになる。それにより、みなとのもり公園には継続的に多くの人々が関わりを持ち続け、衰退することのない公園の維持管理が続けられている、ということがわかった。

(2) イベント参加者の公園運営方式の認知度

今回の調査により、炊き出し訓練参加者のうち、みなとのもり公園が計画段階から市民参画の形が取られていたことを周知していた人は45人中36人という結果となり、全体の約4分の3を占めていた。市民参画の形が取られている公園であることを知っているかどうかという点は、公園運営のソフト面の知名度と捉えることができるため、みなとのもり公園において今まで行われてきたイベントやワークショップなどの活動が確実に成果を表しているといえるだろう。

(3) 新たな参加者を巻き込むための工夫

公園の運営指針などを定めるみなとのもり公園運営会議は、毎月平日の夜19時頃から行われている。その時間帯に参加することが難しい人々をも新しく巻き込んでいくために、通常のみなとのもり公園運営会議とは別に、平日のお昼頃など、今までとは違った時間帯にワークショップやイベント、運営方針に関する会議などを行えば、今よりもっと多様な意見を取り入れることができるのではないだろうかと考える。

(4) 改善すべき点とその改善案

炊き出し訓練において行ったヒアリング調査では、炊き出し訓練に途中から参加した人の中には、「実施日を知らなかった」という人々が多くいた。その中には、「実施日を知っていれば、是非最初から参加したかった」という人が多くいたのである。今後、より多くの人々にみなとのもり公園において行われる様々な活動やその他の諸連絡をもっと伝えることができるよう、活動の宣伝不足の解消策として、既存の宣伝看板の設置場所の見直しと、SNSなどの情報発信ツールの有効活用などが必要だと考える。

6. まとめ

みなとのもり公園では、公園の計画段階から市民参画の形を取り、パークマネジメントが続けられてきた。長い時間をかけ、繰り返し何度もみなとのもり公園と関わりを持ち続けることによって、そこを利用している人々、運営に携わっている人々には、公園に対する深い「愛着」が生まれるということがわかった。一般的な公園では、みなとのもり公園のように企画・構想段階から市民の意見が反映されるという例はほとんどない。出来上がった公園を利用するのは市民だが、公園計画のプロセスに市民の声が入っていないため、そこに「愛着」は発生せず、月日が経てば利用者は減少し、維持管理などの諸問題が発生し、結果的に荒廃に至ってしまうのである。しかし、みなとのもり公園のように、利用者・管理運営者に公園に対する「愛着」が生まれることにより、様々な形で公園と関わりを持つ人々

がみなとのもり公園の「ファン」となり、自主的に繰り返し足を運ぶことになる。それにより、全国各地の公園施設が悩まされているような、利用者の減少が引き起こす公園施設自体の荒廃などの問題は生まれにくく、市民参画の形を取っていない場合と比べて帰属感が生まれるのである。2010年に開園して以来、2014年現在で開園4年目となるみなとのもり公園だが、今のところは自律的で継続的な公園運営ができていけると言えるだろう。

しかし一方で、みなとのもり公園運営会議や、そこで活動している団体が現在行っている様々な活動や、阪神・淡路大震災発生後から現在に至るまでの震災復興のあゆみなどを、後世にまで伝えて続けていくべき世代である10代・20代の若者の参加者がとても少なかったり、各活動の宣伝が不足していたりと、みなとのもり公園にはまだまだ課題がたくさんあることも明らかとなった。

しかし、みなとのもり公園の市民による管理・運営はまだ始まったばかりであるため、今後もみなとのもり公園の管理運営について継続した取り組みが必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたってアンケート・ヒアリング調査に御協力頂きました、みなとのもり公園運営会議参加者の方々及び、調査対象者の皆様に、感謝申し上げます。

補注

- (1) 田代順孝・中瀬勲・林まゆみ・金子忠一・菅博嗣の著書「パークマネジメント⁵⁾」によると、パークマネジメントとは、『パブリックオープンスペースの一形態である公園という生活の舞台を創り、守り、活用していく総合的な仕事のシステムであり、極めて長い時間と経費と労力を要する仕事である。』と、定義されている。

参考文献

- 1) 山崎亮 (2011) 「コミュニティデザイン」, p29, 学芸出版社
- 2) 神戸市, みなとのもり公園 (神戸震災復興記念公園), 日本, <http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/park/intoro/fukkopark.html> (入手日付 2013/11/14)
- 3) みなとのもり公園, みなとのもり公園アクセスマップ, 日本, <http://www.eonet.ne.jp/~sya-oooo-rin/minamori/access.html> (入手日付 2013/11/14)
- 4) 神戸市, 神戸市公園緑地審議会答申書, 日本, <http://www.city.kobe.lg.jp/information/committee/construction/park/toushin.html> (入手日付 2014/6/19)
- 5) 田代順孝・中瀬勲・林まゆみ・金子忠一・菅博嗣: パークマネジメント 地域で活かされる公園づくり, 学芸出版社, p19, p34, pp210~214, 2011年
- 6) 神戸市, みなとのもり公園 (神戸市震災復興記念公園) リーフレット